

1. 東京高師校長嘉納治五郎と校友会運動部の発展

筑波大学 真田 久

1. Kano Jigoro's contribution to the athletic club activities (Kōyūkai Undōbu) in Tokyo Higher Normal School

Hisashi Sanada (University of Tsukuba)

Abstract

The purpose of this study was to clarify the contribution of Kano Jigoro, principal of Tokyo Higher Normal School to the development of Kōyūkai Undōbu (athletic club activities in Tokyo Higher Normal School).

The following conclusion were derived;

Kano recognized the value of sport and exercise through judo. He organized athletic clubs in school as he became principal of Tokyo Higher Normal School to bring up students to be leaders in future. The students understood the philosophy of kano and they taught sport in other schools as instructor to spread sports in all the country.

In addition, Kano accepted Chinese students beginning in 1896 and taught physical education and sports together with modern science, thereby realizing the practical application of international education through physical education and judo. The Japanese students gave Chinese students a yell. It can be said that Kano tried sport education in Tokyo Higher Normal school.

はじめに

嘉納治五郎は、柔道の創設や国際オリンピック委員会委員としての活動のみならず、東京高等

師範学校（以下、東京高師と略す）において、今日の課外活動にあたる校友会活動を盛んにするなど、西洋スポーツの受容とその展開にも貢献した。嘉納の場合、それは単なる西洋スポーツの紹介ではなく、人間形成や指導者としての資質に役立てる教材としてとらえていた面がうかがえる。また、東京高師に入学した留学生も、校友会運動部に入り活動していた。

西洋のスポーツや日本の伝統的な武道も含めて、校友会運動部としてその活動を支援したのが嘉納校長であった。本研究では、そのような観点から、西洋スポーツも含めた運動遊戯の教育的展開を嘉納がどのように行い、校友会運動部が発展したのかについて考察する。それは、東京高師学校の校長として関わった日本におけるスポーツ教育の先駆的例の性格をもつものと思われる。

1. 東京高師校長としての嘉納治五郎

1-1. 嘉納の運動遊戯（スポーツ）観

嘉納は、柔道も含めて、西洋スポーツや遊戯、日本人に伝統的な徒歩や水泳などを総称して、「運動遊戯」と称している。嘉納の考えた運動遊戯の価値については、1910年にまとめられた『青年修養訓』の中で、次のように記されている¹⁾。

「第一に、筋骨を発達させ身体を強健にするという点から、その種類方法を選び、些小の余裕の時間も之を運動に費やすよう心掛けること

第二には運動遊戯を、単に身体のためばかりではなく、自己に対して人に対しての道徳上品位上の修養の資に供すこと

第三にはこのような運動の習慣を修学時代を終わると同時に廃止にしないで永くこれを継続し、心身ともに常に若々としているように臨む」

第一の説明では、身体そのものの機能を発達させることを説き、第二では、道徳上、品位の向上ということに資することができるというものである。嘉納は、道徳的な向上という点に、関心が高かった。これは、嘉納自身が、東大卒業後専科に入り、道徳教育の研究を行っていたことからもうかがえる。

嘉納は青少年に柔道や体育（長距離走、水泳実習など）を行わせることは、身体を強くさせるのみならず、正義、公正、驕らないことなど、精神的、道徳的に自他ともに向上させることができると考えていた。さらに体育を続けることで、心身ともにいつまでも若々しく活動しながら、生涯を幸福に生きることができる、とした。

なお、嘉納のいう道徳とは、1889年の「柔道一斑並に其教育上の価値」で、「体育」、「勝負」、「修心」の三つに分けて説明している中の「修心」にあたると思われる²⁾。嘉納は、柔道の実践による心の教育を「体育」と不可分のものとし、正義、公正、驕らないことなどの徳性を涵養すること、智力を練ること、そして勝負の理論を世の百般に応用することに分けている。智力を練るとは、進歩的な思想を嫌わず、偏見を去り、事実を観察していく科学的な態度を身につけることであり、勝負の理論を世の百般に応用することとは、柔道の修行で得た体験を社会生活の中に生かしていくことであった。

総じて、筋力を高めるとともに、精神的な面での向上、ならびにそれを生涯続けることを奨励する、という考えを明治時代末に提唱していたことは、今日においてもそのまま通用するスポーツの価値観である。今日のスポーツ教育の考えと比しても、嘉納の先見の明には注目すべき面が

ある。このような考えは、柔道の実践を通して、嘉納自身が体得した実践知ではなかったかと思われる。

1-2. 嘉納校長によるスポーツの活用

嘉納は、上記の意義をもつ運動遊戯（スポーツ）を、教育現場で有効に活用するべく、すなわち、学生の教育に資するものとして、東京高師の校長在任中に学生生活の中に取り入れた。

柔道に見られるような、伝統的な武術を近代的に再編して、身体と心を練ることをめざしたのみならず、西洋スポーツについても、積極的に取り入れ、東京高師の教育システムに導入した。そうした面は、高等師範学校および東京高師（1902年に高等師範学校が東京高師に校名変更）校長としての足跡に、見いだすことができる。嘉納の高等師範および東京高師校長としての在任期間は以下の23年の長きに及んでいる。

第1期：1893年9月～1897年8月（4年）

第2期：1897年11月～1898年6月（7ヶ月）

第3期：1901年5月～1920年1月（18年8ヶ月）

嘉納が高等師範学校校長に就任すると、学生たちの体育やスポーツ活動が、校長の後押しで盛んになった。そのようすを概観すると次のようになる³⁾。

・1895年：各運動部を統括する運動会が設立され、学生は、そのうちの一部または数部に所属して、毎日30分以上の運動をすることが奨励された。

・1898年：お茶の水から池上本願寺までを走る健脚競走（長距離競走）が行われる。

・1901年：新たに課外活動を束ねる組織として、運動会から校友会に再編、校長自らが会長に就任した。

秋、大塚で陸上運動会を開催し、全国中学校師範学校生徒の競走会も行われた。

・1905年：夏の水泳実習（約2週間）、全予科生（新入生）の必修となる。

・1908年：柔道と剣道のいずれかを新入生の必修とする。

徒歩競走（長距離競走）が春・秋の年2回行われるようになる。

柔剣道のいずれかを履修し、春と秋に長距離を走り、夏には2週間の水泳実習を行い、陸上運動会に参加、そして校友会活動にも参加する、というのが嘉納校長時代の東京高師の学生であった。文科や理科という専門の如何にかかわらず、すべての学生が参加した。嘉納が校長を務めた期間は、当時の日本で、体育・スポーツに最も熱心な高等教育機関の一つであったといえる。

長距離走や水泳実習、そして柔道または剣道を必修にする一方、校友会としての運動部活動への参加を積極的に奨励することで、学生たちは闊達にスポーツに従事した。嘉納校長時代に誕生した東京高等師範学校の運動部には以下のものがある。

柔道部、撃剣（剣道）部、弓技部、器械体操、相撲部、ローンテニス部、フットボール（蹴球）部、ベースボール部、自転車部、ボート部、徒歩部、游泳（水泳）部、卓球部、ラ式フットボール（ラグビー）部

嘉納は、柔道や撃剣などの武道のみならず、テニスやサッカー、ラグビーなどの西洋のスポーツも学生が行う運動として奨励した。なぜ、嘉納はこのような活動を重視したのであろうか。そ

れは校友会についての嘉納の基本的な考え方に見いだす事ができる。

2. (東京) 高等師範学校における校友会運動部の設立と理念

2-1. 校友会運動部の設立

東京師範学校（高等師範学校の前身校）に、生徒同士の親睦を深める組織として、1880（明治13）年に「寄合会」が設立された。

寄合会の規約によれば、月2回、著名な学者などの講説を聞いて討論し、生徒どうしの親睦を深めることが目的であった⁴⁾。しかしこの寄合会は学生には不人気で、やがて活動が行われなくなってしまった。1901（明治34）年6月21日に尾崎行雄を講師に招聘したのが最終会となった。

嘉納が高等師範学校の校長になって一年余り、この寄合会から独立させる形で、1895（明治28）年に「運動会」という運動部を束ねる組織が創設された。運動会会長には嘉納校長自らが就任しているように、嘉納自身が陣頭指揮をとった。嘉納の運動会への力の入れようが想像できる。

当時、運動会に所属した運動部は、次の6部であった。

撃剣及び弓技部、庭球部、柔道部、器械体操部、相撲部、自転車部。

また運動会が主催して、陸上運動会が行われた。武道場であった右尚館の前で十数種目の運動が行われた。この時の陸上運動会は規模は小さかったが、後に発展するのであった。

1896年の運動会の会計法によれば、正会員は月5銭、教職員は俸給の150分の1を会費として収めた。その4年後の1900年時の運動会予算は、480円で、そのうち庭球部が最も予算配分が多く180円であったことが記されている。

寄合会が1901年6月に最終会を開く直前の5月、校友会設立の提案が嘉納校長よりなされた。世田谷松陰神社への遠足会を催し、職員と生徒が集まった折、嘉納校長の演説の中で、校友会設立を希望する旨が述べられた。

これに対して生徒も抱負と希望を述べる者が多く、同年10月に校友会が設立された。校友会は運動部と寄合会とを統合したものであった。

当時の校友会規則は次のように書かれている⁵⁾。

第一条 本会を校友会と称す

第二条 本会は精神の修養及び身体の鍛錬を計り兼ねて会員相互の親睦を厚くするを以て目的とす

第三条 本会会員を正会員及び特別会員の二種に分ち本校生徒を正会員とし校長教官及び舎監を特別会員とす

第四条 本会の目的を達する為め左の部会を設く

一、談話部会 一学年間 5回以上

一、運動部会 同 5回以上

第五条 談話部会に於ては互いに演説、討論、談話等を為し又は本校職員若くは校外の名士を招聘して演説講話を乞ひ一年一回以上会誌に発刊す

第六条 談話部会に左の支部を置く

一、談話部

一、雑誌部

第七条 運動部会に於ては遊戯運動又は遠足を行ふ

第八条 運動部会に左の支部を置く但時宜により増減することあるべし

- 一、柔道部
- 一、撃剣及び銃創部
- 一、弓技部
- 一、器械体操部
- 一、ローンテニス部
- 一、フットボール部
- 一、ベースボール部
- 一、ボート部
- 一、自転車部

第九条 正会員は必ず一支部若くは数支部に入り運動するものとする

第十条 会費として正会員は毎月金五銭特別会員は同じく俸給百分の一宛て醸出するものとする

第十一条 本会に左の役員を置く

- 一、会長一名 校長を推戴す
- 一、幹事二名 特別会員中より会長之を依嘱す
- 一、部会長二名 談話部会より一名、運動部会より一名 特別会員中より会長之を依嘱す
- 一、委員若干名 各部会及び各支部に四名ずつ 正会員中より公選す

第十二条 役員の仕事は左の如し

- 一、会長は会務を総理す
- 一、幹事は会長を補佐し会務を処理す
- 一、部会長は当該部内の事務を掌理す
- 一、委員は部会長の指揮を受けて部務を処理す

第十三条 会長以外の役員は其の任期を一学年とす但し再任することを得

第十四条 毎学年の始めに委員総会を開き当該年度の収支予算を議題し及び前年度の会務報告をなすものとする

第十五条 談話部会運動部会及び各支部の細則は各部に於て便宜之を定む

第十六条 本会規則を改正せんとするときは役員五名以上又は会員三十名以上の動議により役員会の決議を経て本会長の認可を受くべし

この規約から明らかなことは、寄合会と運動会を統合して校友会が作られ、精神の修養と身体の鍛錬により会員相互の親睦をはかることが目的とされた。校友会が新たに結成されたことで、嘉納校長が会長としてみずから、各運動部の発展にかかわっていくことになる。さらに、校友会全体の行事として陸上運動会や長距離走大会、そして水上運動会（ボート）が開催されることになった。これらの行事には、全校生徒が参加して行われた。

2-2. 校友会運動部の理念

嘉納は、東京高等師範学校創立四十周年を記念して開催された記念号に「校友会員に告ぐ」とした一文を校友会会長として、掲載している。そこに、嘉納の校友会にかける思いが伝えられている⁶⁾。

「校友会設立以前には、寄合会なる名を以て学生時々相会し、互いに談話することがあったが、其れは主として修養上のことにつき談話する位に止まって居た。然るに学校の発展に伴ひ、更に各方面に亘って学生を活動せしめ、殊に体育奨励の機関たる可きものを立てたらどうかという考えをおこし、明治三四年に始めて校友会を創立するに至った。

思うに学校教育は、教場に於て教を受け、寄宿舎に於て監督指導を受けるのみでは未だ完備せるものとは云い兼ねる。なほ学生をして、各々自己の考えを發表し其の考えに基づきて行動せしめ、其の教場並びに寄宿舎に於ける教育の結果の行為にあらはれたるを見て、将来の指導薫陶の方法を考へ、あらゆる機会を利用して訓諭す可きことを決するに就いての資料を得ることを務めなければならぬ。それ故、在学中学生をして各々校友会各部の仕事を担当して、其の事に当らしむるは夫等の目的を達する為、必要なることである。斯かる考えから、校友会に十余の部を設け、学生をして代わる代わる各種の役割に当らしめ、傍実務になれしむるようにつとめて居る。且つ、時々校友会で挙行し、全校学生の参加する長距離徒歩、競走陸上大運動会の如きものは、平素各部各寮にわかれて居る学生をして、一致の行動をとらしめ、共同以て事に当たるの良習慣を養成するに足りると思ふ。

斯く校友会は、教場並びに寄宿舎に於ける普通の教育以外にありて、学校教育上、最も必要なる事柄である。夫故、学校は相当に重きを校友会に置き、或は之を批評し、或は之に注意を加へて、漸次其の発達をはかつて、今日に至った。もとより、今日に於ても、尚不備の点改良を要す可き点は多々あるけれども、世間多数の学校に比し、遜色なき程の状態にあると信ずる。これまことに、創立以来の、幹事長はじめ、教授並びに学生から出た役員 노력によるもの。今や其の努力を謝すると共に、学校としては、校友会設立の目的の一部を達し得たものとして、大いに慶賀するところである。

今茲に此の事を一言して、将来益々完全なる発達を遂げ、校友会創立の目的を遺憾なく実現するに至らんことを希望する。」

この書は校友会が設立された1901（明治34）年から10年後に出版されており、校友会活動の10年間を振り返って書かれている。

ここで明らかなことは、校友会を創立したのは、体育奨励の目的をもって嘉納が創設したということである。

「学生をして、各々自己の考えを發表し其の考えに基づきて行動せしめ」、「学生をして各々校友会各部の仕事を担当して、其の事に当らしむる」とあるように、学生の主体的な活動を期待するものであった。そのことが将来の指導方法を身につける貴重な資料になるというものであった。

また、長距離走と大運動会に全校の学生が参加することで、共同の習慣を養うことも目指された。

一方、生徒監であった峰岸米造は、学校では教師と生徒がお互いに胸襟を開いて接しなければならないが、実際にお互いを知る事はむずかしい、それを校友会の活動が補い、同情同感の念を起こしてうるわしい関係を築いていると述べている⁷⁾。

学生の自主的な活動を促して各運動部、すなわちスポーツの発展に寄与しようとするとともに、将来の指導者としての資質を身につけさせようとしたこと、さらに陸上運動会や長距離走大会などを通して、共同の精神を養うようにしたこと、などから、東京高等師範学校における校友

会活動は、日本におけるスポーツ教育の先駆的な例であったといえよう。

2-3. 「体育科」開設による校友会運動部の発展

東京高等師範学校の校友会は1907（明治40）年に社団法人になり、定款を作成している。その一部は次の通りである⁸⁾。

東京高等師範学校校友会定款

第一章 目的

第一条 本会は社団法人となし会員の精神を修養し身体を鍛錬し以て校風を振作 併せて会員相互の親睦を厚くするを目的とす

（中略）

第四章 会員資格及義務

第四条 本会の会員たるものは左の資格の一に該当するものたることを要す

- 一 東京高等師範学校生徒
- 二 現在の東京高等師範学校職員
- 三 東京高等師範学校卒業生 旧高等師範学校卒業生及旧東京師範学校卒業生
- 四 前任の東京高等師範学校職員 旧高等師範学校及東京師範学校職員

第四章に記された会員資格及義務で明らかなように、卒業生や職員であった者も校友会会員（特別会員）になれるようになった。こうして卒業生も巻き込んで校友会運動部は発展していくことになった。

この当時（1911年）の東京高等師範学校の校友会には、次の11部が登録されていた。

談話部 雑誌部 柔道部 剣道部 弓技部 徒歩部
庭球部 蹴球部 野球部 短艇部 游泳部

また校友会特別資金規定にはその第一条で「短艇（若しくは之に代わるもの）の建造並びに游泳部の拡張の爲め特別資金を設く」が加わっている。短艇部と游泳部には特別の配慮がなされていたことがわかる。

予算面でも明治44年度の校友会の予算は総額5069圓94銭、大きな支出は陸上運動会に550余圓、游泳部に780余圓、庭球部に603圓、雑誌部に510余圓などであった。游泳部は、夏季の水泳実習の予算に多くが使われていた。

校友会活動とは別に、嘉納校長の働きにより、東京高等師範学校内に特科としての「体育科」が1915（大正4）年に開設された⁹⁾。それまでの「体操専修科」は教員の欠乏を充たす必要がある場合に臨時に設置されたコースで、修業年限が3年であったが、体育科は4年制になった。さらに1921年には本科になり、文科、理科と制度的に同等のものになった¹⁰⁾。こうして日本の教育において、体育科の位置が確立されたといえる。

1915年の「体育科」の設置は、校友会運動部の発展に勢いを増すことになる。カリキュラムの充実がはかられ、柔道や剣道を専攻とする学生も増加したからである。嘉納校長は体育科一期生の卒業を見届けてから、1920年に四半世紀に及んだ東京高等師範学校長の任を辞している。

3. 校友会運動部の活動

3-1. 陸上運動会

高等師範学校の大運動会は、1894（明治27）年秋にはじめて開催され、右尚館前の広場に縄を張って、競走、フットボール、三人抜相撲、撃剣、綱引、剣舞など二十数種目の競技が行われた。

校友会設立以後は陸上運動会と呼ばれるようになり、規模は大きくなった。第一回陸上運動会は1901年10月2日に大塚に完成した新校舎にて行われた。経費は前年度の74円から297円と4倍になった¹¹⁾。校友会主催の第二回陸上運動会は1902年10月に行われ30種目あまりが行われた。これには中学師範の来賓競走が行われた。また都内の中学師範のみならず、千葉、埼玉の師範学校も参加した。これは高等師範学校の卒業生がこれらの師範学校に教員として就職し、母校での陸上運動会に参加したからであった。こうして陸上運動会の規模も大きくなり、卒業生を通して各師範学校などにも広まって行くことになる。

嘉納の発案で校友会が設立され、陸上大運動会の予算も多くなるなど、その活動に対する嘉納の積極性がわかる。高等師範学校という性格から、卒業生を通して、他の師範学校などにも普及して行った。これは陸上運動会のみならず、長距離走大会や水泳実習なども同様であった。

第三回陸上運動会は1903（明治36）年11月に東京高師のグラウンドで行われ、師範中学優勝旗競走が正式な種目となり、東京府師範学校が優勝した。翌年の第四回陸上大運動会（明治37年11月5日）の折には、この大会の事務分掌規定が制定されている。これにより、陸上運動会の運営が明瞭化された。すなわち、会場係、装飾係、運動係、賞品係、接待係、食事係、売店係、記録係、庶務会計係を置いて、運営される事になった。

この年の種目数は27になり、師範中学優勝旗競走には20の学校から40名が参加し、東京師範学校の倉井満弘が優勝した。これには久保田文部大臣も参観し、1万人余りが観戦したと報告されている¹²⁾。

1905（明治38）年の第五回陸上大運動会には、東は羽後（秋田）の横手中学、西は宮崎師範学校から、全部で22校が師範中学優勝旗競走に参加した。

第七回から第九回陸上大運動会までは、皇族が参観している。第七回の1907年には三皇孫殿下、第九回には伏見宮、山階宮など7人の皇族が来観した。第八回の折には、角力、棍棒体操、騎馬擬戦、附属小学児童遊戯などを皇族が観戦した。

第十回陸上大運動会は1910（明治43）年10月30日に行われた。

3-2. 校友会各運動部によるスポーツの普及

東京高師校友会の各運動部は積極的に専門学校や中学校の大会を創設し、また指導者を全国各地に派遣するなどして、スポーツの普及に貢献した。そのようすは以下のようなものであった。

柔道部：1902（明治35）年に大塚新校舎柔道場が落成した折、東京の各専門学校学生を招待して第一回柔道大会を挙行了。卒業生のほとんどが全国の中等学校の教員に赴任したので、柔道の素養をもつ教員の着任は、柔道の普及につながった。柔道経験を有する教員の全国派遣の成果として、全国中等学校柔道優勝大会の開催につながった。さらに、柔道大会を主催したにとどまらず、1921（大正10）年から全国の中等学校生を対象とする夏季講習会を開催することとなった¹³⁾。

剣道部：1920（大正9）年以来、東京高師において全国中等学校大会を開催し、1926（大正

15) 年頃より剣道関係者の剣道講習会を開催した。

徒歩(陸上競技)部: 1898(明治31)年第一回長距離競走が行われ、第二回は1901(明治34)年大宮氷川公園で行われた。1904年以後は従来の秋の遠足会を徒歩競走に改め、1908年には春の遠足会をも徒歩競走とし、以後春秋に玉川、大宮等への長距離走が定着した。基本的に全校生徒が参加した。

1901年以来、全国中学校師範学校選手競走を組織し、優勝旗を設けて参加を奨励し、二十数校が参加した。1913年からは大塚板橋間往復長距離競走も加わった。嘉納校長が長距離走を奨励したことから、徒歩部の活動は活発化した。1906(明治39)年には生徒有志が歩行術研究会を作り、組織的な選手養成に取り組み始めた¹⁴⁾。

1911(明治44)年の国際オリンピック競技会派遣選手予選会の結果、1912年、金栗選手は帝大の三島彌彦と共に、わが国最初のオリンピック代表選手としてストックホルムでの第五回オリンピック大会に参加した。金栗は後に箱根駅伝を構想、具体化した。

蹴球部: 1904(明治37)年には、横浜で外人アマチュアクラブに挑戦して敗れたが、同年にフットボール部が『アソシエーションフットボール』と題するサッカーの指導書を鐘美堂から出版した。蹴球に関するわが国最初の指導書の出版であった。1904年のサッカーの試合を観戦した人たちからの要請に基づいて作成したといわれる。

毎年、外国人チームとの試合を通じて技を研鑽し続ける一方で、1903年から各地の学校にサッカーの指導に出かけている。1903年から1912年までの明治時代だけで、次の師範学校にサッカーの普及をはかって指導に出かけた。

埼玉県師範学校、栃木師範学校、群馬県師範学校、青山師範学校、日本体育会、福島県師範学校、茨城県師範学校、茨城県下妻中学校、姫路師範学校、山形県師範学校、奈良県師範学校、滋賀県師範学校、愛知県第三中学校、新潟県高田師範学校。

1909年11月末から東京高師の運動場が附属中学校の建築場として工事に入ると、嘉納校長の敷地である豊島ヶ丘で練習を行わせるなど、嘉納校長は運動部に惜しみない貢献をしている。

水泳部: 1904(明治37)年には師範中野次郎が神伝流、水府流等の諸流派の泳法から、扇横游一段、片手抜扇横游一段等で知られる高師泳法の教程を創始した。高師泳法は本多存師範によって大成されていく。1905(明治38)年予科生全員は、嘉納校長の提案により水泳実習を行うことになった。

各中学校に水泳の指導者として学生を派遣したのは1906年からであった。東京高師では、二級に進むと嘉納校長名で中学校の水泳指導資格が与えられた。彼らは全国の中学校の水泳指導に赴いて高師泳法を教えた。その数は年々増え、1911年以降は10校前後の中学校や師範学校に水泳教師を派遣した。例えば1914年に水泳指導者を派遣した先の学校は次の通りである。

新潟県高田師範学校、新潟県高田中学校、水産講習所、石川県師範学校、石川県立小松中学校、東京府立第二中学校、千葉県水産講習所、奈良県師範学校、福岡県小倉師範学校、山口県室積師範学校、新潟県能生水産学校。

嘉納が東京高師の学生に夏季休暇に課したのが、千葉県館山の北条海岸での水泳実習で、これは嘉納によるスポーツ教育の典型であろう。二週間の間、きつい規則のもとに行われた実習ではなく、伸び伸びと行われているようすが、当時の日誌からうかがえる¹⁵⁾。

「遅きをかこつ朝飯を終ふれば或はピンポンの球を打つもあり、図書室に小説繙くもあり、或はテニスに出で行くもあり。日漸く昇りて暑さいや増せば熱心家の誰彼、先生を促し

立てて海に行く、小屋に水着を脱ぎ己が名札を翻して出席を示しさて水に飛び込みつつ魚の如く、徳利の如く溌然として泳ぎプクプク然として泡を立つ、正午帰りて空腹に飯をつめ込み一休みして又もや泳ぐ日稍西に傾く頃打つて舎に帰り風呂を浴み或は昼寝し或は談ず。時に来る菓子屋餅屋、蟻の如く集るとは誰が形容ぞや、夕暮再び散歩に出づれば暑かりし海岸は今うすれ行く夕映えと共に涼風鷹島の邊より吹きて折から開き出づる夕づつ星の影も清し、月を踏んで北条の町はづれの田舎道行けばいづこの家にや微かに琴の爪音きこゆ。帰ればいつも蚊に攻められ堪へずして逐に蚊帳に入ればいつしか身は夢に誘はれて仙境に遊ぶ。」

嘉納校長は、都会の喧噪を離れ、共同生活をしながらの海浜での游泳は、心身を鍛錬するのにふさわしいと考えていた。

嘉納校長はしばしば北条での水泳実習を実際に訪れているが、水泳部の宿舎を購入する際には、地主と交渉したり、宿舎が完成した折に、その宿舎名を「芳躅舎」（ほうしよくしゃ）と命名するなど、水泳にも力を注いでいた。

以上のように、校友会運動部は、全国各地の師範学校などへの指導者の派遣や大会の開催、指導書の作成などを通して、それぞれの運動やスポーツの普及に貢献した。これらは学生たちが中心になって行われたことではあるが、その背景には、そうした校友会活動を積極的に支えた嘉納治五郎校長の存在が大きかったのである。

4. 外国人留学生のスポーツ活動

4-1. 嘉納校長による清国留学生の受け入れ

東京高等師範学校には、1899年には8名の留学生が修学していた¹⁶⁾。清国からの生徒であったが、これは、嘉納校長が、近代日本として初めての留学生を受け入れたからであった。その始まりは1896年までさかのぼる。

日清戦争で敗れた清国が、日本の近代化を学ぶべく、政府留学生を日本政府に依頼した際に、日本政府は、嘉納治五郎にその受け入れを打診し、嘉納が了承したのであった。

その後、毎年多くの清国からの留学生が嘉納のもとに来るようになったことから、1902年には、彼らに日本語教育と中等学校レベルの普通教育を教授する学校として、弘文学院（後に宏文学院に名称変更）を設立した。この年、嘉納は清国に招聘され、教育振興について意見交換し、普通教育における体育の重要性や柔道と精神修養についても説明している。1903年には、弘文学院の家屋を改修して柔道場をつくり、講道館牛込分場にして、留学生にも柔道を学べる環境を整えた。弘文学院で学んでいた魯迅（本名；周樹人1881～1936年）ら33人がこの年、講道館に入門している¹⁷⁾。

1909年に宏文学院を閉学するまで、7000人もの生徒が学んだ。この宏文学院を卒業した者は、中国に戻る者、大学に進学する者などさまざまであったが、東京高師に進学する者も少なからずいた。嘉納が清国からの留学生を積極的に受け入れた理由については、嘉納自身の次の言葉に示されている¹⁸⁾。

「我が国は、近時数十年の間に欧米諸国の文明を輸入し、その長を採りて我が短を補い、以て百般の事物に改革を施し、長足の進歩をなしたるものにして、その間或る事に於いて

は成功し、或る事に於いては失敗せり。かくの如き経験を有する我が国に学びて改革を施すは、清国のためには大なる得策と謂わざるべからず。(中略)故に清国より来るものは勉めて之を歓迎し、之と相親しみ、之を指導し、之に厚意を表し、便宜を与えざるべからず。

(中略)何れにせよ。学識経験を有するもの、清国に雇聘せらるるに方りては、唯自己の利益をのみ考えず、真に清国の利益を図る考えを以て往かざるべからず。真に善隣の道を尽してこそ、始めてその結果反射して我が国の大利益となるべし。

予は、かくの如き考えを有するが故に、今回弘文学院といへる学校を起こし、清国より我が国に來りて諸種の学問を為す学生の為に便宜を与えることとせり。」

嘉納は、清国が日本の近代化について、成功例のみならず失敗した点も含めて、学ぶことは意味があると、日本の近代化を客観的にとらえる視点を示している。また、日本人は、自己の利益のみを考えず、真に清国の利益を図る考えを以てあたること、真に善隣の道を尽してこそ、始めてその結果反射して我が国の大利益となる、という考えは、後に嘉納が発表する「精力善用・自他共栄」の考えにつながっている。嘉納は清国に対して、誠実に対応した。

宏文学院での授業は、修身、日本語、地理、歴史、算術、理科、体操、幾何、代数、理化、動物、植物などであるが、体操の授業は、週5時間と日本語の次に多かった¹⁹⁾。体操の授業は、東京高等師範学校のグラウンドや体育館を借りて行われることが多かった。宏文学院でのスポーツ活動については、宏文学院独自の陸上運動会が1904年から開催されるようになり、庭球部、弓道部や遠足などの運動部も創られた²⁰⁾。留学生は柔道とあわせて、これらの運動ができるよう奨励されていた。

留学生が大学や専門学校などに入学しやすくするために、嘉納は文部省と交渉し、1901年には、文部省令第十五号により、宏文学院で普通学科(三年)を修業した学生は、京都帝国大学、札幌農学校、仙台医学専門学校、岡山医学専門学校、東京高等師範学校、女子校等師範学校などの文部省直轄学校に無試験で入学することができるようになった²¹⁾。これにより、東京高等師範学校に入学する留学生も徐々に増えたのであった。

そして宏文学院が閉校された1909年以降、1911年までに東京高師に入学した留学生は毎年30名ほどになった²²⁾。

4-2. 嘉納と毛沢東の体育思想

嘉納に教えられた留学生の中には、後の中国を形成する際に指導者として活躍した人が多くいた。文豪魯迅をはじめ、黄興(1874~1916年、辛亥革命で活躍)、楊度(近代思想と中国の伝統から民本思想を提唱)、陳天華(1875~1905年)、秋瑾(1875~1907年、詩人)、陳独秀(1879~1942年、『新青年』主筆として毛沢東にも影響を及ぼした)、田漢(1898~1968年、東京高師に入学、劇作家)ら、後の中国の指導者たちが含まれていた。さらに、楊昌濟(1871~1920年)は、嘉納に推され宏文学院から東京高師へ入学し、その後1908年にスコットランドで哲学、倫理学、教育学を学び、教育による救国を掲げる教育者になった。1913年湖南第一師範学校で毛沢東(1893~1976年)と出会い、毛沢東の青年時代の師になった人物である。

これらの人脈は毛沢東の体育思想に影響を及ぼした。毛沢東が学生の時に、「体育の研究」を著したが、そこには嘉納治五郎の名前が出てくるのみならず、内容も嘉納の考える体育と同様の

考えが見られる。以下に嘉納との関連が示唆される『体育の研究』の文を示す²³⁾。

「現代の文明国のうち、体育はドイツがもっとも盛んで、フェンシングは全国に普及している。日本には武士道がある。近ごろは、わが国古来の余技をとりいれ柔術をつくりだしたが、その剛直なことはみるべきものがある。(中略)

体育はひとつの道で、徳育、知育と組み合わせられて全きものとなる。しかし、徳といい、知といっても、身体に帰するのであって、身体がなければ徳も知も存在しない。(中略)

道徳もまたとうとぶべきものである。道徳は社会秩序の基礎で、自他の関係を平らかにす。しかし、道徳を宿しているものはなにか。身体こそ、知識を乗せ、道徳を宿している。(中略)

体育こそ、われわれの生活で第一の地位を占めるべきもので、身体が強壮であってこそ、はじめて学問も道徳も修得することができ、遠大な効果をおさめる。(中略)

東西の有名な体育家、アメリカのルーズベルト、ドイツの(中略)、日本の嘉納は、みな身体が非常に弱かったが、強壮な身体を持ち主となった人々である。」

特に道徳が社会秩序の基礎であり、それを学ぶことで自他の関係を平らかにすることの言及は、嘉納の思想の影響を示唆するものであろう。

また、長距離競走は耐久力の訓練に最も良い、と述べるなど、この点も嘉納の考えと一致している。

4-3. 東京高等師範学校における留学生のスポーツ

嘉納が校長を務めた東京高等師範学校において、留学生たちも、日本人学生と同様に、運動部に所属していたことが、1909(明治42)年から1915(大正4)年までの東京高等師範学校の校友会誌から見受けられる。

1909年の陸上大運動会の報告には、「外国留学生二百ヤード競走」が行われている。そこには、日本人学生が留学生の名前を呼びながら声援を送っているようすが描かれている²⁴⁾。

「之が済むと軽気球は三十二回外国留学生二百ヤード競走を報じる。場の内外素晴らしい人気である。ズドーンと鳴る。無闇にソンさん、トンさん、ゴンさんなどと野次る。中々疾い。蔣君が十米突を抜いて勝った。」

また同年5月11日に行われた水上運動会(ボート)には、清国留学生18名が出場している。彼らは、学校行事である陸上大運動会と水上運動会に参加していた。

1910年には、東京高等師範学校校友会に清国留学生29名が入会している。彼らは日本人学生と同じように校友会活動に参加する事ができた。さらに校友会運動部では、蹴球部に清国の留学生が参加していた。

1909年1月31日に東京高師蹴球部大会で清国留学生22名が紅白戦を行っている。スコアは0対0であった。蹴球部大会での留学生同士の試合は、1909年の11月にも行われた。また、1911年1月には、外国人留学生文科対外国人留學生理科の試合が同蹴球部大会で行われている。1912年、1913年には清国留学生マッチが行われた。以上のことから、蹴球部には相当数の留学生が在籍していたことがわかる。

宏文学院は1909年に閉学するが、その後も東京高等師範学校には留学生が在籍し、サッカー

をはじめとするスポーツに参加していた。やがて留学生たちは、対外試合も行うようになった。最初の対外試合の相手は豊島師範学校で、1910年の6月と11月に東京高師のグラウンドで行われた。

6月は留学生チームが1-0で勝利した。秋は留学生チームが優勢であったが、最終的に豊島師範が挽回して勝利した。留学生の応援に80人ほどの他校を含めた留学生が来場して賑わった事が記されている。さらに同年11月に行われた東京高師蹴球部大会でも、第3回清国留学生紅白戦が行われた。

1910年の秋に行われた留学生チームと豊島師範学校の試合のようすが、同校の校友会誌に書かれている²⁵⁾。

「十一月十三日豊島師範学校対清国留学生蹴球仕合を午後二時より本校運動場にて行へり、春の仕合に一對零にて留学生の勝利に帰したれば豊島方にては熱烈なる練習を積み留学生亦技の錬磨に怠りなかりし故、この仕合は頗る興味を以て迎えられたり。

午後二時より児島氏審判の下にゲームは開始せられぬ。留学生の応援隊は他校よりも来れるなるべし。無慮七八十人の多きに達せり。ハーフタイム前最初は留学生遥かに優勢なりしが豊島方のフォーワーズ一時にドット肉迫せしかばキーパー少し狼狽しけん遂に一点を占められき。ハーフタイム以後よく豊島の軍を圧せしも遂に傷つく能はずして一對零にて豊島方の勝利となりぬ。」

1913年6月には、在留朝鮮学生で結成された太平倶楽部を相手に留学生チームがたたかい、2-0で留学生チームが勝利した。中国人留学生対朝鮮人という、日本に住んでいるアジア人たちの国際試合であった。

校友会誌にみられる最後の留学生の試合は、1915年1月に行われた対埼玉師範学校との試合で、留学生チームが2-0で勝利した。留学生チームの実力もかなり上がっていたことがわかる。

このような留学生たちのスポーツの奮闘に、当時の日本の学生たちは、早くからエールを贈っている。それは1909年の次の一文に示されている²⁶⁾。

「この日天気晴朗。風さへなく、従って寒気和かやなり。午前七時半、劈頭第一競技者としてフィールドに現はれしは、我が珍客留学生諸君なり。留学の当初に於て身体操縦の不自由不活発なりしより、端なく邦人の嘲笑を招きしも、不屈なる精神と熱心なる練習は、大いにその効果を現し、今や邦人に比して些かの遜色なきに至れり。学成り錦を故郷にかざるの日、体育界にも亦齋す所あらん事を希望して已まざるなり。」

ここでは、留学生たちが、入学当初はさほどうまくなかったが、徐々に技術をみがいて上達していったことを示している。一方、将来帰国したならば、母国の体育界の発展にも寄与してほしいことを願っているのである。このようなお互いの関係ができたのは、嘉納校長を中心とした東京高等師範学校の校友会活動の成果であり、日本におけるスポーツ教育の実践といえるのではないだろうか。

まとめ：嘉納治五郎によるスポーツ教育

イギリスのパブリックスクールでは、将来の指導者を育成するためにスポーツが積極的に活用されたと考えられた。スポーツにより協調、共同の精神やフェアプレイなどの観念が身に付き、

それが社会に出てから、指導者の資質となる、というものであった。

これが初期のスポーツ教育であるが、それと同じようなことを嘉納は考え、実際に実践したといえる。教育界の指導者になる学生たちに、専門の如何にかかわらず、運動部に所属して、自主的にその運動、スポーツを実践し、その普及にもかかわるように方向付けた。東京高師の学生たちはそれを理解し、多くの学校に指導者として出かけ、それぞれのスポーツの全国的な普及に貢献した。

嘉納校長は、日本人学生のみではなく、中国からの留学生に対しても、同様の態度で接した。嘉納の設立した宏文学院から、東京高等師範学校に進学した留学生も多かった。彼らは東京高師の蹴球部に所属したり、陸上運動会や水上運動会にも参加した。蹴球部では、留学生チームが他校と試合を行うまでに成長している。そして日本人学生も彼ら留学生にエールを贈っている。つまりスポーツを介した青少年の交流による相互の発展と成長について、嘉納は明治時代に実践済みであった。このことが、1909年に国際オリンピック委員会委員への就任を呼びかけられた時、前向きにとらえられた要因ではないかと思われる。嘉納治五郎は、日本におけるスポーツ教育の先駆者でもあったといえよう。

一方、宏文学院や東京高等師範学校で、さまざまな運動やスポーツを学んだ留学生たちが、帰国後に母国の体育やスポーツの発展にどのように関わったのかは、今後の重要な課題といえよう²⁷⁾。

注・引用文献

- 1) 嘉納治五郎:青年修養訓. 同文館, 1901, pp. 100-101
- 2) 嘉納先生伝記編纂会:嘉納治五郎. 講道館, 1964, pp. 291-301
- 3) 東京高等師範学校校友会:本校創立四十年記念校友会発展史. 1911, pp. 151-162
- 4) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, p. 15
- 5) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, pp. 18-19
- 6) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, pp. 1-3
- 7) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, pp. 4-5
- 8) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, p. 21
- 9) 文部省令第4号, 官報, 第766号, 1915. 2. 23.
- 10) 東京高等師範学校一覧、自大正四年四月至大正五年三月、22ノ1-24頁、1915. 12
- 11) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, p. 20
- 12) 本校創立四十年記念校友会発展史. 前掲書, pp. 27-29
- 13) 東京高等師範学校柔道部史刊行会:東京高等師範学校柔道部史. ぎょうせい, 1987, pp. 3-5.
- 14) 東京文理科大学・東京高等師範学校:創立六十年, p. 409-411
- 15) 東京高等師範学校校友会誌4号1904
- 16) 邵 艶, 船寄俊雄:清国末期における留日師範生の教育実態に関する研究-宏文学院と東京高等師範学校を中心に-. 神戸大学発達科学部研究紀要10-2, 2003, pp. 85-86
- 17) 老松信一:嘉納治五郎と中国人留学生教育. 講道館柔道科学研究会紀要5, 1978, p. 88
講道館:講道館牛込分場修行者誓文. 1903, 講道館所蔵
- 18) 嘉納治五郎:清国. 国土44号, 1902, pp. 1-5
- 19) 弘文学院:弘文学院章程. pp. 4-7

- 20) 弘文学院:運動部設置の件. 講道館資料
- 21) 宏文学院:宏文学院一覧. 講道館資料,1906, pp. 11-12
- 22) 邵 艶,船寄俊雄:清国末期における留日師範生の教育実態に関する研究. 前掲書. p. 394
- 23) 毛沢東著,山村次郎訳:体育の研究. ベースボールマガジン社,1964, pp. 10-17. 原文は1917年
- 24) 東京高等師範学校校友会誌20号,1909,p. 125
- 25) 東京高等師範学校校友会誌21号1910,pp. 117-118
- 26) 東京高等師範学校校友会誌18号1909, p. 107
- 27) 北京オリンピック終了直後の2008年8月26日付けの人民日報(北京版)、山下泰裕6段へのインタビュー記事中で、中日友好交流史上の逸話として、嘉納治五郎について触れている。著名な教育者であった嘉納治五郎が柔道を創設し、7000人もの中国人留学生を受け入れて日本語と各学科の教育を教えた事、それらの留学生の中には、後の中国の偉大な指導者たちが含まれていたこと、などが紹介されている。中でも、毛沢東の青年時代の師である楊昌済も嘉納のもとで学び、柔道が大好きであったこと、毛沢東も嘉納治五郎と日本柔道の精神を称賛していること、などが書かれている。(人民日報 2008. 8. 26)